

# 阿波つれづれ譚

AWA

TSUREDURE

TAN



## 一緒に暮らしみとる

10年前のこと、夜遅く電話を取ると「迎えに来て」と聞き覚えのある声が聞こえてきた。今、どこに居るの」と尋ねても、同じ言葉を繰り返した。「何か見える」と聞くとき、「〇〇のネオン」と言い、電話が切れた。翌朝、その「〇〇のネオン」を頼りに行くと、老人保健施設があった。施設を訪ねたところ、突然、彼女が抱きついてきた。10年ぶりの再会だった。

### 友人との再会

しばらくして後見人も決まり、「幸せの家・ありがとう」で一緒に暮らすことになった。少しずつ症状が重くなると、食事の飲み込みも悪くなってきたが、心は若返り、彼女を青春時代へと引き戻した。夢を語っては生活を楽しみ、その優しい人柄は、共に暮らすみんなを幸せにした。しかし、10年の歳月は驚くほど早く過ぎ、彼女にも、人として定められ

た命の終わりが訪れようとしていた。食欲が日増しになくなって、眠る時間が長くなると、介護や看護サービスの領収書、銀行の通帳、トサイドで、バイタルサイン（呼吸などの生命兆候）を確認していると、彼女の瞳が「どうかした

その穏やかな視線に安堵しながら、冷たくなった手をそっと握りしめる。確か、彼女の母は、彼女が3歳の時に亡くなり、兄が母親代わりに育ててくれたと話していたが、彼女とは若いとき、共に看護学を学び、看護学生の教育に携わった。学生を愛し、優しい素晴らしい教師だった。

また人は、命を閉じても、なお人の尊厳を伝え、命の尊さを残された者たちに教える。享年75。彼女が大好きだった私の娘が旅路の支度をした。薄化粧に黒のイブニングドレスの装いはとても華やかですき

日々が続き、また、その祈りは、みどりへのエネルギーとして、私たちに与えられる。

それから3日後の深夜。眠りは、さらに深い眠りへといざなう。瞳孔は散大し、呼吸がゆっくりと静止すると、心臓の拍動も止まる。人はすべての緊張から解放され、言い知れない深い静けさに包まれ永眠する。